

台湾／東呉大／交換留学(2025 年度秋学期)

台湾・東呉大学交換留学を通して得た学びと異文化体験

政策情報学部 川崎 公志

① 交換留学先の海外文化体験について

私は 2025 年度秋学期、台湾の東呉大学に交換留学生として約 5 か月間留学した。留学前の私は、日本での生活しか経験したことがなく、海外で暮らすことに対して漠然とした不安を抱いていた。言語の違いや生活習慣の違いにうまく適応できるのか、現地で友人を作ることができるのかなど、心配は尽きなかった。一方で、幼い頃から地図を見ることが好きで、世界にはどのような国があり、どのような人々がどのような価値観のもとで生活しているのかに強い関心を持っていた。そのため、実際に海外で暮らすことで、自分の価値観がどのように変化するのかを確かめたいという思いもあり、留学を決意した。

台湾に到着して最初に感じたのは、人との距離の近さである。大学のオリエンテーションなどを通して、初対面であっても自然に話しかけてくれる学生が多く、日本で感じていた人間関係の距離感との違いに驚かされた。日本では、知らない人に話しかけること自体にためらいを感じる場面が多く、必要最低限の関わりにとどまることが一般的である。しかし台湾では、挨拶や簡単な会話が当たり前のように交わされており、そこに特別な意味づけはされていないように感じられた。このような環境のおかげで、留学初期の不安は徐々に和らいでいった。

授業の雰囲気も、日本の大学とは大きく異なっていた。東呉大学では、学生が自ら意見を述べるのが前提となっており、正解かどうかよりも「自分はどう考えたか」が重視されていた。ディスカッションの場では、発言の回数が評価の一部になる授業もあり、黙って聞いているだけでは授業に参加しているとは見なされなかった。留学当初は、英語で自分の考えを表現することに自信がなく、発言することをためらってしまう場面が多かった。しかし、周囲の学生は文法や発音の細かい間違いを気にすることなく、話の内容を理解しようとしてくれた。その姿勢に触れ、次第に「完璧に話すこと」よりも「伝えようとする」ことが大切なのだと考えるようになった。

日本文化概論や日本概論の授業では、日本人である私が日本文化について説明する立場になることが多かった。普段の生活では意識することのない日本の習慣や価値観について、「なぜそうなっているのか」「他国と比べてどのような特徴があるのか」と問われることが多く、自分自身が十分に理解できていない部分が多いことに気づかされた。例えば、年長者を敬う文化や集団を重視する考え方について説明しようとする、言葉に詰まってしまうことがあった。この経験を通して、日本で当たり前だと思っていたことが、他国では決して当たり前ではないという事実を強く実感した。

生活面で特に印象に残っているのは、夜市や屋台文化である。台湾では、食事の場が単に空腹を満たすための時間ではなく、人と人が交流するための大切な場として機能しているように感じた。夜市では、友人同士や家族が集まり、料理を分け合いながら会話を楽しんでいる光景をよく目にした。そこでは、食事をするこ

とと会話をするのが自然につながっており、その場にいるだけで人とのつながりを感じることができた。日本では、一人で食事を済ませることも珍しくないため、この違いは非常に新鮮であった。

また、台湾での生活を通して、社会的な配慮が日常の中に自然に溶け込んでいると感じた。公共交通機関では、高齢者や妊婦の方に対して、特別なアナウンスや指示がなくても自然に席を譲る光景を何度も目にした。大学構内では男女共用トイレが設置されており、多様な価値観を受け入れる姿勢が環境として示されていた。これらは特別な取り組みとして強調されているのではなく、日常の一部として受け入れられている点が印象的であった。このような場面に触れるたびに、社会の在り方は制度だけで決まるものではなく、人々の意識や行動によって形作られているのだと感じた。

台湾の人々は日本に対して強い関心を持っており、日本のアニメや音楽、食文化について話題にされることが多かった。日本人である私に対して親しみを持って接してくれる学生も多く、そのこと自体は非常に嬉しく感じた。一方で、日本では台湾について詳しく学ぶ機会が少ないという現実にも気づかされた。台湾の文化や歴史、社会について理解している日本人は決して多いとは言えず、そのギャップに少し寂しさを覚えた。この経験から、異文化交流は一方的な関心によって成り立つものではなく、互いに相手を知ろうとする姿勢があってこそ意味を持つのだと考えるようになった。

この留学生活を通して、私は異文化を「理解する対象」として距離を置いて見るのではなく、「共に生活するもの」として受け止めるようになった。文化の違いは戸惑いを生むこともあるが、その違いを受け入れ、向き合うことで初めて見えてくるものがあると感じている。台湾での 5 か月間は、私にとって価値観を大きく揺さぶられる経験であり、今後社会と関わっていく上での考え方の土台になったといえる。

② 専攻分野との関連で関心を持ったテーマ

私は政策情報学部地域政策コースに所属し、地域社会が抱える課題や行政の役割、まちづくりの在り方について学んでいる。台湾・東呉大学への交換留学は、これまで日本を前提として考えてきた地域政策や都市の見方を見直す大きなきっかけとなった。

台湾で生活してまず強く印象に残ったのは、人が自然と集まる場所が非常に多いということである。夜市や屋台街、公園、大学周辺の広場などでは、特別なイベントが行われていなくても多くの人が集まり、それぞれが思い思いの時間を過ごしていた。そこでは、単に買い物や食事をするだけでなく、友人や家族との会話、店の人とのやりとりなど、人と人との関わりが日常的に生まれているように感じられた。

これらの空間は、行政によって細かく計画された場所というよりも、人々の生活の積み重ねによって自然に形づくられてきた場所のように思えた。人が集まるから店が増え、店が増えるからさらに人が集まるという循環が生まれており、「人の行動」がまちをつくっていることを実感した。

現代東アジア社会や台湾社会変遷の授業では、台湾がさまざまな文化や歴史的背景を受け入れながら社会を形成してきた過程について学んだ。授業で学んだ内容を、実際の街の様子と結びつけて考えることで、地域政策は制度や計画だけでなく、人々の生活や価値観と深く関わっていることを理解することができた。

例えば、市場や宗教施設が住宅地の中に自然に存在している様子から、地域の文化が都市空間のつくり方に影響を与えていることを具体的に感じた。授業で学んだ歴史や社会の変化が、目の前の街並みにそのまま表れていることに気づき、教室での学びと現地での体験が結びついた瞬間だった。

また、公共空間における人々の行動も非常に印象的だった。地下鉄やバスでは、優先席の表示が目立たなくても、高齢者や妊婦の方が乗車すると、周囲の人が自然に席を譲る場面を何度も目にした。これはルールによって強制されているというよりも、「そうするのが当たり前」という社会全体の意識が行動として表れているように感じられた。

日本のまちづくりでは、バリアフリー化や制度の整備が先に進められることが多い。一方で、制度があっても人々の行動が追いつかない場面も少なくないと感じている。台湾での経験を通して、地域政策において重要なのは、形や制度を整えることだけでなく、人がその空間をどのように使い、どのように関わるかを同時に考えることだと強く感じるようになった。

大学構内に設置されていた男女共用トイレの存在も、まちづくりを考える上で印象に残っている点の一つである。多様な価値観への配慮が特別な取り組みとしてではなく、日常の選択肢の一つとして受け入れられていた。これは、制度だけでなく、社会全体の理解や意識の積み重ねによって成り立っているものだと感じた。

日本概論や日本文化概論の授業では、日本社会の特徴について説明する機会が多くあった。その中で、日本のまちは安全性や効率性を重視する一方で、人と人との関係がやや希薄になりやすい側面があるのではないかと考えるようになった。台湾で見たような、日常の中で自然に交流が生まれる空間は、日本の地域社会にも必要ではないかと感じている。

将来、公務員として地域に関わる仕事に就きたいと考えている私にとって、台湾で見た人と人とのつながりは、理想的な地域社会の一つの姿である。行政の立場として制度を運用するだけでなく、その制度が人々の生活や行動にどのような影響を与えるのかを想像する姿勢が重要であると考えられるようになった。

さらに、台湾での生活を通して、地域社会における「顔の見える関係」の重要性を強く感じた。夜市や屋台では、店員と客の距離が近く、短い会話の中でも信頼関係が生まれているように思えた。こうした関係性は、行政サービスや地域活動を円滑に進める上でも大切な要素であると感じる。人と人とのつながりがあるからこそ、地域の課題が共有され、協力し合う意識が生まれるのではないかと考えるようになった。

また、台湾では学生や若者が地域の一員として自然に街の中で過ごしている姿が印象的だった。大学と地域の境界が曖昧であり、学生が地域に溶け込んで生活していることで、街全体に活気が生まれているように感じられた。このような環境は、地域と教育機関が相互に影響し合いながら成長している一例であり、日本の地域政策においても参考になる点が多いと感じている。

今回の留学を通して、まちづくりとは行政が一方的に形をつくるものではなく、そこに暮らす人々の行動や意

識とともに育まれていくものだと実感した。台湾で得たこの視点を、今後の大学での学びや将来の進路に活かし、より人に寄り添った地域政策について考え続けていきたい。

台湾・東呉大学での交換留学は、私にとって大きな挑戦であり、人生の転機となる経験であった。多くの失敗や戸惑いもあったが、その一つ一つが自分の成長につながった。このような貴重な経験ができたのは、千葉商科大学の国際課や先生方、そして周囲の支えがあったからこそである。心より感謝申し上げたい。

